

## 平成16年度 研究の概要

[発刊にあたって](#)

[研究主題](#)

[研究の概要・内容](#)

[道徳・特活部会](#)

[教科提案](#)

[文部科学省指定研究「5・4制について」](#)

香川大学附属坂出中学校



### 発刊にあたって

学校長 七條正典

春暖の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、昨今、学力低下の問題が盛んに論議されております。「ゆとり教育」についての批判も見受けられますが、「ゆとり」は、何もしないゆとりではなく、じっくりと試行し、考えることができるためのゆとりであり、学びを豊かなものとするための時間的なゆとりを子どもたちがもてるようになるとことではなかったのでしょうか。また、「生きる力」や「新しい学力観」は、子どもたちにとって、生きることにつながる学びの成立という視点から、その在り方を考える必要があるのではないかでしょうか。

昨年度より、私どもは、「学校教育制度における『5・4制』の区切りに関する妥当性の検証」についての研究に取り組み、知・徳・体のバランスのとれた子どもを育てるための豊かな学びの成立に向けたカリキュラムづくりに取り組んでまいりました。

そして、本年度は、育てたい生徒像を洗い直すとともに、教科、道徳、特別活動の一体化を図ったカリキュラムの構築に取り組んでまいりました。その過程を通して、現在の「学び」が、真に生徒の「生きる」ことにつながる豊かな「学び」となっているのかという視点からの問い合わせもし今後の課題として出てまいりました。

本号では、本年度の研究の取り組みについて、各教科、各領域ごとに紹介いたしております。何とぞ、ご忌憚のないご意見とともに、温かいご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### 〔研究主題〕

## 豊かな学びを育むトータルカリキュラムの創造

「生きること」と「学ぶこと」の統合をめざして

## 1. 研究の概要

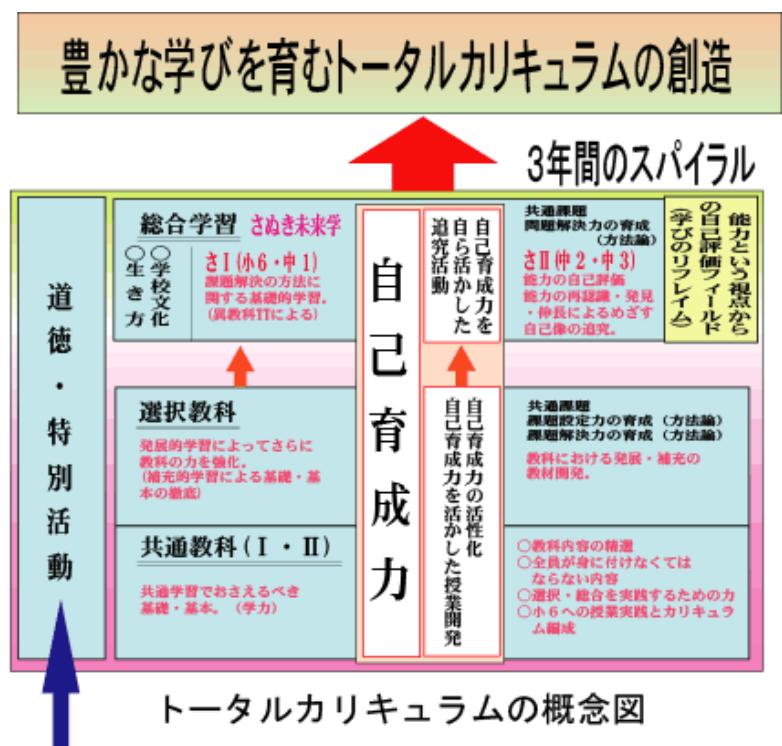
本校は学校教育活動全体のカリキュラム作りを研究の大きな柱に据え、従来からの研究ベースを発展させつつ、平成16年度教育研究発表大会では、教科系（必修教科、選択教科、総合学習）におけるカリキュラム構造を発表し、また、カリキュラム全体を運営する授業構築論（方法論）として、「自己育成力」（対象化－相対化－今後の方針性の見極め）という生徒の思考に則した授業展開を構築定義し、その力を引き出し活性化させる授業展開を追究した。

今期は、上記研究に引き続き、トータルカリキュラム編成のもう一方の柱として、道徳・特別活動におけるカリキュラム構築に着手し、教科、道徳、特別活動の一体化を（クロスカリキュラム化）構造的に編成することで、学校教育全体を捉えたトータルカリキュラムの完成をめざしている。 本校教育におけるめざす生徒像を明確にし、生徒の成長の具体を様態としてイメージ化したのち、それを学校教育のどの場面でどのように指導することが求められるのか。学校教育全体の中で、教育活動を有機的に関連づけ、豊かな人間として育むための価値ある教育とはどうあるべきか。「『生きること』と『学ぶこと』の統合」をキーワードとして学校教育における人間教育の在り方を追究することを課題としている。 このことは、2年次を終えた文科省指定研究である「『5・4制』の妥当性検証」における中学校を4年間とした学びの構造にも通じるものであり、新たな中学校教育の在り方の提言につながっていくものである。

## 2. 研究の内容

## (1) 研究の重点課題について

平成16年度の教育研究発表大会では、共通学習（I・II）、選択教科、総合学習（まんべんがんI・II）の段階的カリキュラム構造を中学校4年制を想定して再構築するとともに、自己育成力の活性化を図る授業展開によって、豊かな学びを可能ならしめるトータルカリキュラムの在り方に重点を置いて研究推進してきた。さらに本年度は、重点課題として「『生きること』と『学ぶこと』の統合」を研究のキーワードに掲げ、現時点でのカリキュラム構造に道徳、特別活動あるいは日常の学校生活を包含した教育活動全般を有機的に関連させることによって、生徒が主体的に知識・経験を獲得し、統合し得る「豊かな学びを育むトータルカリキュラム」を目指す。



## (2) 「生きること」と「学ぶこと」の統合

人はなぜ学ぶのか？それは「自己の夢の実現に向け、よりよく生きていくため」であると言えよう。すなわち、「よりよく生きる」ためには、生涯にわたって「学ぶこと」あるいは「学び続けること」が求められる。このように「生きること」と「学ぶこと」は元来一体的なものであり、よりよい生き方、在り方を願い求める限

り、それが単独で存在するものではない。つまり、「生きること」と「学ぶこと」の統合を目指したカリキュラム構築は、生涯学習の基礎を培うという視点から、一人一人の生徒に自己実現を図る資質・能力を身に付けさせ、「生きる力」を育むためにも重要である。そのためには、教科教育による学びを単に知識や技能の習得で完結させるのではなく、学びの価値に気付かせたり、人としての生き方、在り方についての自覚を深めさせたりすることが求められよう。さらに、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度や豊かな心を涵養する特別活動領域や道徳領域においての学びと、どのように関連させればより効果的に信頼性のあるカリキュラムを構築することができるのか、また、客観的で科学的な根拠に基づいた教育活動が行えるのかを理論と実践の両面から追究する必要がある。

### (3) 研究の具体

学校教育目標の具現化を目指すために様々な教育活動場面における「目指す生徒像」（生徒には「こう在りたい自分」という投げかけ）の具体的な様態を全校生徒及び全教師から意見を収集するとともに、本校生徒に培いたい力や資質等を分析し、それらを包括的にまとめて、本校教育が目指す生徒像を明確にした。そこからさらに下位項目を設定し、具体的な指導や評価項目としても活用できるシステムを構築したいと考えている。このことは、教師側のみならず、生徒一人一人が各教育活動の諸場面にて下位項目をもとに自己の取り組みの様態をイメージ化することで、対象化、相対化が促され、自己育成力の活性化にもつながるものと考える。また、上記とは別に、生徒の変容を追跡するために、特定の行事あるいは活動を焦点化し、事前、事後に全校生徒へ意識調査を行うことで課題認識や活動様態等を掌握することによって、発達段階に適した指導内容及び方法等に対するより効果的な展開を模索しようとしている。現段階におけるカリキュラム構築に関しては、まずははじめに、教科、道徳、特別活動の接点として、教育活動の中で取り扱いの時期が比較的安定し、教育的価値に共通項が見出せる行事（本校の特色ある5大行事）に着目し、その5大行事とのリンクを図った道徳カリキュラムを編成することとした。さらにそこへ特別活動（ここでは、主として学級及び生徒会活動）としての実践的アプローチをからませることで道徳、特別活動領域の有機的な関連を図ろうとしている。

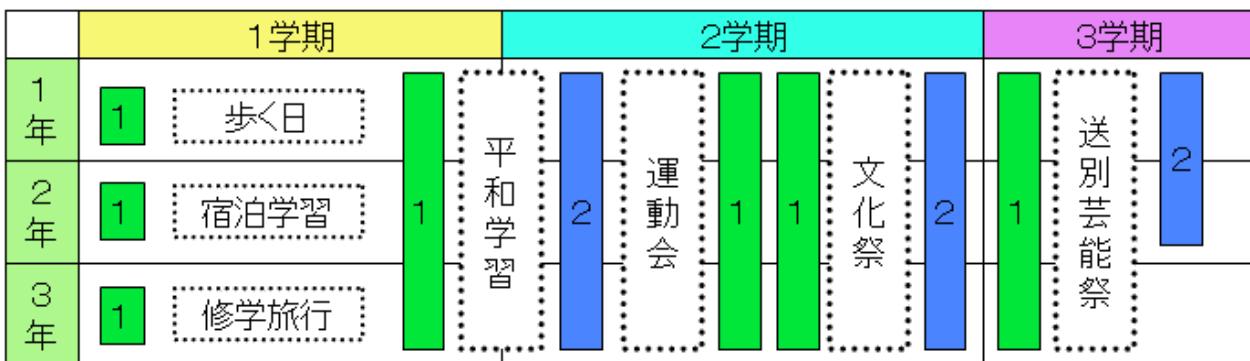
[>>戻る](#)

## 《道徳》

本校における「目指す生徒像」を具現化するための、全教育活動における道徳教育の展開について研究・実践している。現在は、道徳の時間の扱いと他の教育活動との有機的関連を中心に取り組んでいる。中でも、特別活動との関連、特に本校の年間5大行事との関連について「道徳研究プロジェクト」を中心として組織的に整備を進めている。

年間35時間の道徳の時間の内、8時間を5大行事との関連で扱うことになる。ここでは、行事に対する自己の現状の姿（道徳的価値観）を確かめ（対象化）、資料や他の生徒の道徳的価値にふれ（相対化）、今後の自己のありたい姿について考える（今後の方向性）という、「自己育成力」を活かした授業展開を基本とした学習が展開される。また、3年間の系統性についても「道徳研究プロジェクト」を中心に十分検討を行っている。

年間における行事とのリンクと、各行事における道徳のねらいは、以下の通りである。



### 〈各行事における道徳のねらい〉

歩く日	○社会的常識はどうあるべきかを、他者とのかかわりから考える。
宿泊学習	○よりよい社会の実現のために、集団生活ではなぜルールが必要かということを改めて考える。
修学旅行	○場に応じた言動とはどういうものかを考える。
平和学習	○戦争の悲惨さを知り、平和の尊さについて考える。
運動会	○各分野・担当の活動を通して、他者の思いをとらえる。
文化祭	○お互いに理解し認め合える人間関係を築こうとする心情を養う。 ○自己の存在価値に気づかせ、よりよい学校文化を創造しようとする心情を養う。
送別芸能祭	○自分がいろいろなものに支えられていることに気づかせ、それらの支えに感謝する気持ちを大切にする心情を育てる。

「送別芸能祭」とのリンクによる実践の概略を以下に示す。

#### 主題名「感謝の思いを込めて」（第1時）

「送別芸能祭」は、本校においては学習成果の集大成の場である。まず、各学年の教科学習・総合学習で学んだことを生かしたり、学ぶことの価値を再認識したりする場である。また、さまざまな特別活動などを通じて築いてきた人間関係を基盤として学年団の団結した力を発揮する場もある。一方、それら培ってきたものが支えとなって今の自分があるのだということを再認識し、謙虚な姿勢でのものごとを見つめ直す場もある。そこで心に生じる素直な感謝の念は、さらなる学びへの意欲を生むとともに、よりよい人間関係を希求する心情を高める。

#### 各学年の指導のポイント

##### 1年生

「送別芸能祭」を経験したことがないため、過去の1年生の『送別芸能祭後の感想』を資料とし、3年生や仲間とのかかわりを含め、1年間の学びを振り返らせてさまざまな感謝の思いに気づかせる。

##### 2年生

「送別芸能祭」を1度経験しているので、経験をふまえた上で2年生の『送別芸能祭後の感想』を資料とし、3年生や仲間とのかかわりを含め、2年間の学びを振り返らせてさまざまな感謝の思いを見つめさせる。そして、さまざまな学びが今の自分の支えとなっていることに気づかせる。

##### 3年生

最後の「送別芸能祭」を迎えるにあたって、3年生の『送別芸能祭後の感想』を資料とし、人とのかかわりを含んだ3年間の学びを振り返らせ、それらの支えの上に今の自分が成り立っていることに気づかせる。そして、それに対する感謝の思いを大切にして「送別芸能祭」にどう参加するかを考えさせる。

## (資料) 過去の1・2・3年生が「送別芸能祭」後に書いた感想（自作資料）

### 第1時の実践を終えて

1年生は初めての「送別芸能祭」ということで、前年のビデオを視聴していたものの、やや「感謝」と結びつきにくい点があったようである。2・3年生は経験したことを踏まえ、広い意味で自己の学びを振り返ることができ、「送別芸能祭」に対しても新たな意識が芽生えたようである。当日の発表や次年度の取り組みが楽しみである。

### 《特別活動》

#### ○ 特別活動でのねらい

特別活動は教科等で学んだ事柄を発揮する実践の場である。本校では、目指す生徒像により近づくため、効果的に行事を配置・活用し、特別活動を各教科、総合で培われた知識や技能、また、道徳で養われた心情、判断力などを実践の中で感得する場としてとらえている。行事という全員が共通に体験する活動の中で、教科、道徳での学びをつなぐ、あるいは学びを発信する場としてそれぞれの領域とリンクを図り、「学びを生かす」特別活動の計画、実践を行うことが研究を深めていくことにつながると考える。

具体的には例として、下記の文化祭での実践例はもとより、生徒会活動や学級活動といった自治的活動の意味を問い合わせことで、よりいっそう生徒自身の手で行われる活動の実現を目指している。そのことこそ「学ぶこと」と「生きること」の統合を実現する手だてではないかと考える。教科をはじめとする学習活動を通して「知り」「わかった」事柄をさらに自分自身で実践の場で「考える」活動とすることが特別活動の役割ではないだろうか。

次年度は、今年度の実践をさらに進め、綿密な各行事とのリンクを完成させていきたい。また、生徒と教師とともに作り上げる附属坂出中学校を目指して現在も生徒会活動も巻き込んでの附坂中づくりに取り組んでいるところである。教科、総合、道徳での学びの集大成として、生徒自らが計画し実践する特別活動、発信する特別活動の実現を目指して研究をさらに積み重ねていきたいと考えている。

#### ○ 実践事例 文化祭（附中元気村）

16年度の文化祭（附中元気村）では、これまでの実践に加え、より生徒主体の運営を実現しようと考えた。そのためのしきけとして、村役場の編成、村長の任命等をおこなった。元気村への出展希望のあった企画については、文化祭実行委員が集まった村委会でひとつひとつ吟味し、出展の許可を生徒たちに行わせる場を設けた。村委会では、新しい案として、「門をつくろう」という声もあがり、初めての試みとして、本年度は門が見事に完成した。また、道徳の授業で養った「今年の文化祭では、こんな自分でいたい」という心情を、実践に移すことができた。



【附中元気村の門作りの様子】



【附中元気村開村式での村長あいさつ】

**TOPへ** [>>戻る](#)

## «国語科»

言語は人の生活を支えている柱の一つであり、豊かな言語の使い手になることは、よりよく生きることに直結すると言ってよいだろう。国語科では、従来より豊かな言語の使い手を育成するために、「基礎的な言語の意味を獲得させ、それを深化・拡充させつつ、各場面に積極的に転移させる能力を養う」ことに重点的に取り組んでいる。基礎的な言語の意味を獲得する段階において、言語感覚はある程度磨かれる。それは感性や情操が豊かになることにつながり、まさに心が育つことを意味する。

単元においては、自己の言語認識の獲得状況を他者と交流させ、言語認識の広範化を図る場面を設定している。そのような交流場面では他者の言語認識を理解しなければならないが、そこで発揮されるのは、理解力と同時に他者尊重の態度である。国語科において、学ぶことは、自己の言語能力の向上のみならず、他者とのかかわりを含めたよりよい生き方を目指すものである。

時期	活動の具体（活動する部署、内容等）
2ヶ月前	<p><b>生徒会本部</b> … 文化祭実行の決定（本部の意向、全校生の意見） ①やるべきではないの確認…住民の意識</p> <p><b>住民会本部文化課</b> … 文化祭実行委員会（元気村才媛会編） ・今年の文化祭の方向性を検討、文化祭との密接体験づくり ・住民の大勢が来村（参加費定、企画書類、運営会議、日程、時間の確認等） ②自分たちの手で文化祭実行、組織編成、担当教諭の活躍により一層盛ることへの意欲化</p> <p>→文化祭組織編成</p> <p>企画運営部 アート、交流、運営 各委員会ごとに活動の企画を行う。 ◎活動計画の作成、実行（各担当教諭の監修）…元気村を創りあげる 自愛・愛任</p> <p><b>全校生模への元気村への参加呼びかけ</b></p> <p>◎全校生模への参加についての周知・参加するのが趣旨でなく、すべての住民が参加の是非から考る</p> <p><b>住民はじめ各団体</b> …参加の趣旨についての説明…やらされているから参加するべきことへの意識改革 ◎参加希望団体はこの趣旨を十分理解の上、開催部会で話し合を主とする</p>
1ヶ月半前	<p><b>企画運営部・審査・参加団体の決定</b></p> <p>企画運営部、文化決定…会場を決めて、全校一斉開催することで、責任をもった活動を行わせる</p> <p><b>開会式本部（Nekoma Village）のスタート</b></p> <p><b>文化祭実行会場</b></p> <p>各団体の準備、企画書の提出…企画書の確認の上に上り、各団体での練習上げができるしきけ ①やるべきではないの確認…各団体に自身と責任を負わせる…元気村構成の一環にする</p> <p>◎各参加希望団体は内容の練習上げ…前回者としての慣習教諭の各団体でのかけに上り、内閣の大変</p>
1ヶ月前	<p><b>1週間前</b></p> <p><b>文化祭実行会場</b></p> <p>各団体の準備…会場の活動の確認…片づけの確認 ◎アート部 同時アート…製作部門と実行…早い段階からのスタート可能 ◎交換部 審査部会との定期事務の確認 ◎運営部 元気村才媛会（運営）…各自のスケジュール表或 ◎文化部、広報部、運営部、審査部は引き続き上の活動にあたり</p> <p>◎各団、誰が活動に担当部署をつけ、担任（しりゆう）を自覚的に行う … 例年、大切だら、先輩自身からアイデアを引き出したりかけを工夫する（生きる研究）</p> <p><b>開会式の合い言葉=生前の社説を取上げない！「それは生前の社説ではござんのか」</b></p> <p><b>各団体の会場</b></p> <p>各団体に責任者1人…真質、実践座談すること、確かな生前記録…遺稿教材としての活用 ◎楽しみながら責任ある活動…豊かな創造性と社会の中での個性を引き出す経験</p> <p><b>1週間前</b></p> <p><b>元気村役場</b></p> <p>最終確認会議、各関係の方、輪間にへの周知、会場への完了 当日準備の仕上げ</p> <p><b>当 日</b></p> <p>「当日の活動はそれまでの結果、大切なのはそれまでの過程！」</p> <p><b>2週間後までに</b></p> <p><b>元気村役場裏面</b></p> <p>本年度の振り返り…外への発信（広報部を中心） ◎今年度の振り返りを発信という形で下さい。次年度への財産とする</p> <p>◎今後も「活動の開拓についての會議（学級の開拓意見会）」 月、各団体の会場（文化部）を運営する時間でできないと その代替は文化祭後、三月開幕式後で会場の時間をあてる</p>

【附中元気村活動・運営の全体計画】



佐藤宏一



佐藤浩二

国語科では、各領域において「相手理解」を指導事項の一つに位置づけている。そして、他の指導事項も含めて、目標・活動内容・題材を系統的・段階的に組み込んだ教科カリキュラムの編成に取り組んでいる。



## «社会科»

安藤孝泰

北岡 隆

社会科における「生きること」とは、社会の中でより公正な判断をすることを考える。また「学ぶこと」とは将来のよりよい社会を形成していく一員となる力を培うことと考えている。

そこで「生きること」と「学ぶこと」の統合を次のように捉えた。

将来の社会の形成者として必要な基礎的な知識を培い、社会認識を形成すること。そのうえ社会生活についての理解の仕方を学ばせ、将来の社会を構成する一員として準備することであると考えた。

また、社会科と道徳の関係を次のように捉えている。

道徳教育において、社会的論争問題が計画的に配置され、開かれた論議がなされるならば、社会科における合理的意志決定能力の育成の場とほとんど変わらないものになっていくと考えている。悩み苦しみながら意志決定をしていくのが人間社会で生き抜くことであることを、生徒にわからせたい。それこそが「生きる力」の育成である。そのような社会科教育をめざし研究推進をしている。

\* 「公正な判断」=広い視野に立って多面的・多角的に見て判断すること、「社会の形成者」に必要なもの=広い視野に立って愛情をもつて、国の生き方・あり方を考えられる力、「広い視野」=空間的に見る・時間で見る・システム的に見る（構造的に見る）



## «数学科»

半山章人

岡田美江

2003年のOECDの調査から、数学への興味・関心が低く、数学の楽しさを感じている生徒が少ないとや、学んだ数学を日常生活にどう生かすかを十分に考えることができていないということがうかがえる。すなわち、学習したことが「生きる力」につながっていないと考えられる。

そこで本校数学科では、「生きること」を「現実の諸問題をいろいろな視点で見たり、与えられた条件の中で解決したりしていくこと」とし、「学ぶこと」を「事象を数理的に考察する能力を高めるとともに、数学的な見方や考え方のよさを知り、それらを進んで活用する力を身に付けること」として、「生きること」と「学ぶこと」の統合を図るためにトータルカリキュラムの構築を進めている。カリキュラム構築の視点として、次の3点を考えている。

1 「数学的な見方や考え方」の分析と内容におけるつながり

2 数学の楽しさを感得させるための数学的な活動の位置づけ

3 身のまわりの事象を利用した教材の位置づけ



### «理科科»

理科教育の本質は、実験、観察を通して自然現象の真理の追究をしたり科学的な知を育成したりすることにある。また、この本質をねらいながらも、育ちゆく生徒たちに右に示すような人間としての「資質」を培うことも理科教育においては大切である。私たちは、理科における「生きることと学ぶこと」の統合をめざし、学習の過程で実験、観察の結果をただ記憶させるのではなく、実験の目的に合わせて、条件を制御させたり、目的やそれに合わせた条件設定を踏まえ、その結果が意味することを正しく見据えて考察させたりすることが必要であると考えた。そして、理科の学習において、単元や実験などの配列を工夫したり、右に示すようなねらいを位置づけたりすることで本校が目指しているトータルカリキュラムの構築につながると考え、現在研究を進めている。

#### 理科学習をとおして培いたい資質

(1) 条件を制御しながら実験を進め、考察する経験



謙虚な人間性の育成

(2) 失敗経験とそれを乗り越える経験



粘り強い人間性の育成

(3) 協力、分担しながら課題解決にあたる経験



他者との協調性の育成

### «音楽科»



十川裕史

本校音楽科では、音楽の「かたち」から「こころ」を味わえるトータルカリキュラムの構築を目指して研究を進めてきた。中学校音楽の大きな目標は、「音楽を愛好する心情」を育て、「豊かな情操」を養うことであり、それは音楽に対する価値観や感情を育て、音楽に敏感に反応しそれを味わう力を豊かにすることである。それによって、生涯にわたって音楽に働き続ける力を培い、日々の生活を豊かに「生きる力」を育むことをねらっている。そのために授業では、音楽自体がもつ固有の特質である「かたち」にかかわることができる音楽体験をとおして、美しいものを美しいと感じ、その「こころ」を味わうことができる美的感受性を発達させなければならない。その目指す生徒像は、教室の片隅に生けられた一輪の花、また何気なく道ばたに咲く小さな花、それらに気づき、その存在やその空間が醸し出す「こころ」を味わうことができる生徒である。そこで、日々溢れんばかりの音楽情報の中を生きている生徒に対して、授業の中で扱う音楽のどこをどう生徒に見せ、いかに気づかせ、その音楽の美しさにいかに触れさせるかを研究している。それによって、その音楽がもつ「こころ」を味うことができる生徒の可能性がさらに広がる。したがって生徒は、音楽を「学ぶこと」によって、日々の生活をより豊かに「生きること」ができるのである。

## «美術科»



河内直人

美術科には、色彩や形態、材料等で表す基礎的な技法・技術、デザイン・構成力、鑑賞の能力や知識などの「美術の学び」と、創造力や発想力、感性、情操、自他の尊重、異文化理解等の「美術による学び」の二つの特性がある。前者は美術科でしか育てることのできない独自の学びであり、手段である。また、後者は他教科等でも育てているが、特に美術科が至近に位置し、目的とする学びであり、生涯にわたって心豊かに生きることと密接に関わる学びである。すなわち、美術科の最終目的は、表現や鑑賞の具体的な学習・指導を通して人間形成をする。あるいは新たな人間像を模索せることにある。

本校美術科では、これまで鑑賞の発達段階を分析することによって客観的で妥当性のあるカリキュラム編成を試みてきたが、それらはあくまでも基礎基本としてのスキル獲得に偏重したものであり、美術を学ぶことによって育つ資質・能力を企図したものとは言えなかった。そこで、「生きること」と「学ぶこと」の統合を目指すべく、あらためて美術科が担う役割と教科性、目指すべきところを整理するとともに、現時点でのカリキュラム構造に「美術による学び」の理念を導入し、再構築する。さらに、他教科や他領域との学びとのリンクを試みることにより、合理的かつ効果的なトータルカリキュラムを構築したいと考える。



## «保健体育科»

池下一顕

長尾亜紀

保健体育科では、「生きること」を「その子どもたちが自分が持っている最高のものを發揮しながら生きていくこと」とし、そのために必要な3要素を、1.良い頭 2.丈夫な身体 3.コミュニケーションしていく力と考える。そこで、本教科の「学ぶ場」の中心となる「スポーツ」が、人間として必要な実に多くのことをバランスよく学べる場であることを教師・生徒が共に再認識することで、適切なスポーツ実践により生徒たちは「生きること」と「学ぶこと」の統合の図りながら、なおかつその力を学び伸ばしていくものと期待している。

適切なスポーツ実践のために、「心技体」の3観点からなる学習目標を設定することと、ここ数年間継続研究してきた「人との関わり」に着目した、心を育てる学習活動の中で、特に「コミュニケーションしていく力」つまり「自分以外の人とコミュニケーション（本当のチームワークつくりのために、自分の意見や考えがきちんと言える）することができる」ということを中心に置いたトータルカリキュラムの構築に取り組みたいと考えている。



## «技術・家庭科»

氏家徹也

齋藤恵子

生活を工夫し創造することを目標とする本教科にとって、「生きること」とは、「生活の現状を理解し、自立してよりよい生活をする営み」であり、「学ぶこと」とは、「具体的な実験、実習、観察、調査などを通して、知識や技術が習得できる喜び」であると考える。我々は、「よりよい生活」を追求することによって、科学技術の発展とよりよい生活環境を手に入れてきた。同時に、多くの困難な問題も生み出しあったが、問題のために新しい知識や技術を習得したり生活を見つめ直したりすることで解決してきた。このように、「生きること」と「学ぶこと」は常に有機的に連動し合ってきたと言える。本教科では、「学ぶこと」が自分たちの生活や将来の生き方につながることに気づかせたい。そして、単に人として生きるだけではなく、どうすれば「生活に喜びを感じる」ことができるかを考えさせたい。そのためにも、「学ぶこと」の必要性や有用感が感じられるような指導場面を設定し、本教科だけでなく、他の学習活動と機能的にリンクさせたトータルカリキュラムの構築と題材開発の研究を目指しているところである。



#### «外国語科»

中野光夫

小川正晃

外国語科では、『国際理解』『他者理解』『文化継承』の3つを段階的に考えていくことで、「生きること」と「学ぶこと」の統合を図る。まず『国際理解』では、他国の人と思いを通じ合うために、勇気をもって自ら語りかけるにはどうしたらよいかを考える。次に『他者理解』では、自らの語りかけから、相手を理解し自分も理解してもらうにはどうしたらよいか、また互いに理解し合うことで自分の中に達成感、そして充実感を感じ取るにはどうしたらよいかを考える。「他者理解」から「自己実現」へのつながりもさぐっていきたい。最後に『文化継承』では、互いの文化を尊重する中で日本の文化の良さを見つけ、コミュニケーションを通して伝えていくにはどうしたらよいかを考える。これら3つを実践していくために、修学旅行や広島平和学習などの学校行事を、効果的にリンクさせていきたいと考えている。初対面の外国人とのコミュニケーションを数多く経験することが「生きること」と「学ぶこと」の統合の第一歩と位置づけし、その活動を実りあるものにするために教師がどのように関わっていけばよいかを探求していきたい。



#### «学校保健»

久米恵子

学校における健康教育は、人の命の大切さを学ぶことが根底にあり、その上に「こころ」「からだ」の健康がある。生涯を通じて健康で安全な生活を送るために基礎を培うという観点から、学校教育活動の中で、体育・保健体育等の各教科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動などすべてに関連して行われている。そしてそれらが、互いに指導内容の関連を図ったり、指導時期に配慮したりしながら、効果的に指導がされなければならない。自分の身体そのものの不思議さやすばらしさを味わったり、毎日の生活そのものの健康に与える影響を感じたり、命の誕生から死まで受け継がれ、そして流れていく命のすばらしさを味わったりすることで、自分が健康であることのよさを分かることが「生きること」であり、知識だけに終わらず実践し、生活の中での知識とはかけ離れていることがないようになると即ち「学ぶこと」が大切である。

学齢期のライフスタイルは成人になってから各種の疾病の発生と極めて深い関連があるといわれている。そして、精神的な発達については自分を意識化し、対象としてある程度客観的に観察することができる、心身ともに発育発達の著しい時期である。今、こころの健康をテーマに取り組んでいるが、心豊かで、前向きな、自分を大切にする子どもを育てていきたいと思っている。



[>>戻る](#)

## 文部科学省研究開発学校指定研究 2年次 香川大学教育学部附属坂出学園（幼・小・中・養護）共同研究

園児・児童・生徒の生活や学びの状況に適応した教育課程を創造するため、小・中において「5・4制」を実施した場合の幼稚園と小学校及び小学校と中学校の接続の在り方、並びに幼・小・中一貫した教育課程、指導方法及び評価方法について検証する。

「小学校6年生を中学校に一定期間通わせたときの、小学生の生活および学びの適応度を検証する」

### 1 研究開発課題について

昨年の1年次においては、小学校6年生の児童に対し、中学校1年生（1部2年生）の指導内容を、中学校の教員が、中学校で指導した場合の習熟状況について検証を行った。今年度の2年次は、小学校6年生の指導内容を、中学校の教員が中学校の思考形態や指導方法に照らして指導した場合と、従来の小学校の指導に即して小学校教員が行った場合との習熟状況における差の検証を行った。

小学校と中学校の指導の差については、小学校を具体的、実際的、指示的、さらには基本的な学習の繰り返し等、基礎・基本の力と基礎的な学習方法の定着を主眼においていた学習構造とし、中学校は、抽象的、全体的、概念的、さらには知の統合や課題設定、課題解決といった内容及び方法で学習を構築することで差別化した。この点を踏まえて、小中の教科部会において、題材の内容にあわせた指導案を作り、それぞれの検証テーマに即して授業を実践した。また、総合学習においても、小6・中1の異学年合同による課題解決学習を実践し、テーマを掲げ、追究する学習の可能性を検証した。

さらに、生活環境に関する適応や、児童・保護者の意識等においても、昨年同様、実態の把握、児童アンケート、保護者アンケート等を資料として分析し、5・4制の妥当性を検証した。

### 2 研究計画

#### 【検証項目】

##### (1) 平成15年度（1年次）

学習…中学校の学習内容を施した場合の適応度  
環境…中学校の教育システムに対する適応度

##### (2) 平成16年度（2年次／本年度）

学習…6年生の内容を、中学校のシステムで中学校  
教官が指導した場合の適応度  
環境…前年度に引き続き実施。前年度との比較検討。

生活領域	学習領域
<input type="radio"/> 基本的生活習慣	<input type="radio"/> 環境
<input type="radio"/> 校則領域	<input type="radio"/> 時間
<input type="radio"/> 自治領域	<input type="radio"/> 担任制
<input type="radio"/> 課外領域	<input type="radio"/> 学習内容
<input type="radio"/> 身体疲労度	<input type="radio"/> テスト
<input type="radio"/> 人間関係	<input type="radio"/> 総合学習

«国語科»

説明的文章における筆者の主張を、全文から的確に読み取ることができるかの検証

説明的文章において、「文章の展開を段落ごとに要約させ、段落の繋がりを押さえながら順次読み進めることで、全体の構造を理解させ要旨を読み取らせる」小学校指導形態と、「全体的に文章を扱いながら、筆者の思考の展開と文章構造を児童自らの力で読み取らせ、要旨を全体の中から読み取らせる」中学校指導形態とに大別し、小学校東組は小学校で小学校教師が、西組は中学校で中学校教師が（後期は東西学級入れ替え）それぞれ同時に指導した場合の、読み取り能力や学習定着度の差について比較検証した。

中学校の指導形態による指導において、児童は十分読みを深める能力を有しており、自己の読みの根拠を積極的に全体の前で発表し、各意見を比較検討しながら筆者の主張を導き出すことができた。授業後の到達度テストの結果も中学校指導学級の方が高ポイントであった。小学6年生の精神発達や思考形態は中学校の指導方法を要求しており、自己主張の芽生えと指導方法の適応は、より児童の読みを深めるものとしてカリキュラム編成の価値あるデータとなるものである。

## «社会科»

### 空間・関係認識から見た「5・4制」カリキュラム試案の実践検証

安藤 孝泰・北岡 隆

昨年度の研究から地理的分野においては、6年生後期からのスタートが望ましいという結果が得られた。その上で今年度の歴史的分野の実践を積み重ねてさらにその妥当性を確認することができた。

また、今年度前後期を通じて明らかになったことから考えて、社会科として提案した「5・4制」カリキュラム試案の構成において、身近な地域や実物（復元模型も含む）を活用できる歴史学習を冒頭におき、6年後半から地理分野の学習を進めていくとすることは、歴史的分野の後半における空間の広がり、関係認識の重要性からも地歴の配置についてその妥当性を確認することができたのではないかと考える。次年度は、社会科のトータルカリキュラムの完成ということを考えると公民的分野での実践を行い、その内容や位置づけについても検証できるような方向で計画している。

## «数学科»

### 式変形による代数的な指導の可能性を探る

～面積図を使わずに「わり算のきまり」のみで、分数のわり算の計算方法を理解できるかを検証する～

半山章人・岡田美江

分数のわり算の演算決定については、小学校では丁寧な扱いをしている。初めに面積図を用いて計算の答えを確認した後、「わり算のきまり」を利用して、分数のわり算の演算方法を導いている。しかし、面積図を用いても、その図を理解することが難しかったり、なぜわる数の逆数をかけばよいのかという理由が十分に説明できなかったりと、課題がある。そこで、面積図を利用せずに「わり算のきまり」だけで計算方法を多様に考えさせる方が児童の理解を深めるために有効かを検証した。しかし、授業後のテストの結果から、分数のわり算の演算方法については、面積図を用いて視覚的に理解させ、 $\div 1$ にすることだけを考ええた小学校担任の指導の方が、有効であると考えられる。小学生には視覚に訴える学習や、一つの方法でじっくり考える学習が、有効であることがわかった。

## «理科»

## 観察、実験でのモデル化やグラフ化に関する可能性の検証

真鍋正史・石川恭広

本年度は、小学6年生が現在学習している内容において、粒子の考え方を導入しモデル化の状況を分析したり〔前期〕、定量的な実験における技能面やグラフ化など表現面での詳細なデータを得たり〔後期〕した。

その結果、前、後期とも同様に、技能面や表現面では、学習指導に差異を設けた東組と西組で大きな違いは見られなかった。むしろ、中学1年生と小学6年生との学習経験の差によるものの方が大きい。

具体的には、モデル化やグラフ化に不十分な点が見られる。そして、気体検知管の取り扱いや回路の組み立てなど、基本的な実験器具の操作技能においても不的確さが見られる。しかし、これらの科学的な技能に関する課題は、仕方を視覚的に説明して捉えさせたり、何度も繰り返し指導を行ったりすることで可能となる。さらに、小、中学校で現在行われている科学的な技能に関連する指導事項を見直し、系統的で早期の適切な指導を施すことで解決されると考える。

### 《音楽科》

#### 曲想を感じ取って表現をすることに関する可能性の検証

-「カントリーロード」・「ふるさと」の表現活動から-

十川裕史

小学6年生の児童に対して、朗読によって言葉の様々な表現を創り出させることを手段として取り入れ、表現する中で曲想を感じ取らせることを中学校での指導の差異にした。つまり、児童に表現をすることとは何なのか、表現をするとはどうすることなののかを体感させながら、朗読を基にした教材に対する自己の表現の様態を振り返らせることによって曲想を感じ取らせようと考えた。

客観的な結果を得るために、その教材に対する児童の印象やイメージの状態を知る手がかりとなるSD法を取り入れた。その反応を調べると、前・後期とも授業の前後の変化で、扱った教材に対してしっかりととしたイメージがもてたと考えられる結果が、多くの児童に見られた。その数は、小学校で授業を実施したクラスの児童と比べても大差がなく、逆に中学校で指導を受けた児童の方が良い結果の児童の数多かった。したがって、5・4制の妥当性を探すことにおいて、小学6年生への中学教師による音楽の指導法は、妥当性が十分あると考えられる結果を得た。

### 《美術科》

#### 造形要素の分析的な見方や感じ方ができるかを検証する

河内直人

今期は、中学校側の指導理念に基づいて基礎基本の定着や分析的な見方・感じ方等の価値付けを付加したが、結果として、同題材でも意図的に思考の材料を多く与えたり、時間的ゆとりを必要最小限度にとどめた場合、十分な理解が得られない場面もあった。もちろん、小学校5年間のカリキュラムの上に、こうした学習指導に対する準備がなされていたと仮定すれば、恐らく無理は生じなかつたと判断されるが、レディネスやリテラシーが不十分な段階で指導理念の異なる手法が導入されたときに抵抗を示す傾向が現れたということだろう。したがって、こうした指導法に関する適不適は、題材そのものの価値付けを指導者側がしっかりと押さえ、カリキュラム全体の中で適切な指導方法を模索することが重要と考える。今後は、全学年の小学校1年生～中学3年生までの各発

達段階の児童・生徒を対象とした意識調査及び造形的嗜好調査をもとに暫定的ながらも各学年の造形的発達段階を見出すとともに、題材及び指導法の相違に対する反応を分析する中で5・4制の区切りの妥当性を探りたい。

## «保健体育科»

### ハードリングのフォームの改善に着目した

#### 単元構成においてより効果的に技能習得できるかを検証する

池下一顯・長尾亞紀

小学校では、運動の特性を味わうことや競争の仕方を工夫することに着目した単元構成を行っている。中学校では、ハードリングフォームの改善に着目した単元構成により、児童の技能習得状況にどのような違いが見られるかを検証した。

50m走と50mハーダル走のロスタイルを縮めるために、一人ひとりが意見を出し合い、ハードリングのフォームを部分的に相互評価させる活動を行った。しかし、ハードリング技能の習得状況を比較すると、どちらとも記録の向上が見られたが、伸び率に着目すると小学校の方がその度合いが高いものとなつた。

特に巧ち性を要する運動においては、分習した動きをスムーズな一連の動きとして統合させる十分な練習時間の確保が必要であり、小学校6年生の段階では運動の特性を十分に味わう段階を経て、細かなフォームに着目した学習を行うことが望ましいことが分かった。

## «技術・家庭科»

### 家庭生活に関する知識・理解に基づき、状況に応じた技能習得ができるかの検証

氏家徹也・齋藤恵子

指導要領における小学校と中学校の指導目標には、「実践的・体験的な活動の充実」が強調されている。

本年度、実践する喜びを味わうことを重視した小学校の指導に対して、中学校では、知識や技術の基礎・基本を徹底し、より専門的な知識をもとに、生活を工夫し創造することに重点をおいた指導を試みた。

技術分野では、情報通信を行う際に留意しなければならない意識や内容を明確にするため、コンピュータ室内的イントラを利用し、「ネチケット」を題材としてメールの送受信を行った。小学校では、「ネチケット」について話し合いをさせ、指導後に送受信を行った。中学校側は、送受信を行った後に、直接書きこんだ内容について指導を行つた。双方に、ネット上で情報を処理ことへの意識の高まりが見えた。

家庭分野では、みその調理上の性質を五感と結びつけた体験活動によって、実感を伴う知識・理解にしていくことが可能であった。また、衣服の機能や役割に視点をおいた授業展開によって、エプロンのデザインの工夫が広がつた。どちらの題材もワークシート、アンケートなどによる検証から「楽しくやってみよう」から「知識・理解に基づいてやってみよう」という授業展開に変わっても十分対応できたことが分かった。

## «外国語科»

### 外国語を学習対象として見つめることができるかの検証

中野光夫・小川正晃

2年次には、小学6年生に「言語の中の異文化」を理解することの喜びを体感させることができ、「外国語そのものを学習対象として見つめる」ことに結びつくかどうかを検証していきたいと考えた。

2年次の前期と後期に渡る研究により、以下のことを検証することができた。

1 授業の中で、外国語と日本語の類似点や相違点を気づかせることにより、小学6年生でも「外国語そのものを学習対象として見つめる」ことができる。

2 また、外国の文化や人々との交流に関する適切な情報を提供することにより、小学6年生も「外国へ行ってみたいと思う」ようになる。

このような発達は、それぞれの児童の外国語学習により良い効果をもたらせることが期待できる。外国語学習の入門期であり、学習指導要領や教科書に指導内容が指定されていない小学校においてこそ、「言語の中の異文化」を理解することの喜びを体感させる価値があるのでないかと思われる。

## «I-2コース»

### 生活英語標本箱 - 外国のことばや文化のある生活 -

中野光夫・仲尾次瑞枝(附属坂出小学校教員)

昆虫の代わりに、街のなかの英語や外国語を採集し、その意味や内容、そしてそれら外国語の使用目的やねらいを分析することが主な学習課題である。

昨年度の研究では、「小学6年生が、まんでがんIの学習に十分適応することができる」ということを実証することができた。本年度は、より良い学習条件を整えるために1「学習集団における効果的な学年の比率」、そして2「ゆるやかな学習の配列」について重点的に研究を重ねた。そして、1「小学生と中学生の人数比率は1対1が適切である」2「昨年度までの3週間集中型より、10週間に分散し定期的に配列させたカリキュラムの方が良い」という結果を得た。どちらにおいても、児童の精神的な負担を軽減できたようであった。しかしながら、フィールドワークにおける児童・生徒の学習様態には問題点が残っている。「フィールドワーク・マニュアル(仮題)」を編集し、校外での自主的な学習を支援したい。

## «I-3コース»

### 発電の達人

岡田美江・長船准児(附属坂出小学校教諭:前期)・佐柳仁(後期)

本年度は、エネルギーの中でも「発電方法」に視点をあて、条件を変えいろいろな風車や水車を作り、発電量を比較することで効果的な発電装置を探る調べ学習を行った。

5・4制の妥当性を探るために、「電圧計の使い方」や「グラフの利用の仕方」、「専門家の方の講話の聞き方」に視点をあて、小学6年生と中学1年生の違いをアンケートや小テスト等でみることにした。結果、小学6年生と中学1年生の間に若干の差異があったものの、小学6年生もまんでがんIの学習に十分適応できるといえる。また、小学6年生にとって、中学1年生の存在は非常に大きく、使ったことのなかった電圧計も、班内で協力して扱えていた。しかし、グラフのかき方については、小学生の方が丁寧さに欠け、時間をかけての指導が必要であると感じた。昨年度の課題をもとに、受講する小学生と中学生の人数の比率を等しくし、班編成を小中男女各1名ずつの4名として活動を進めたことも成果があった。

